



被災者支援における宗教の役割や心のケアを議論したシンポジウム(京都市左京区)

被災者へ 宗教が果たす役割は

京大こころの未来研がシンポ

東日本大震災の被災者に対して、宗教はどのような役割を果たせるのか。京大こころの未来研究センター(京都市左京区)はこのほど、シンポジウム「災害と宗教と『こころのケア』」を催した。被災地の僧侶や研究者たちが、大津波を受けた地域で神社が歴史的に果たしてきた役割や、宗派を超えた被災地支援などについて報告した。

同センターは震災直後から、宗教学や民俗学、心理学の観点で「こころの再生に向けて」と題した共同研究に取り組んでいる。その一環でシンポを開いた。

宮城や岩手など被災4県を視察した同センターの鎌田東二教授(宗教学)は、津波が襲った仙台南若林区の浪分神社を紹介。「過去の被災体験を伝える記念碑としての役割は今回生かされたのか」と問題提起した。

福島県在住の僧侶で作家の玄侑宗久さんは、県沿岸部の浜通り地域に約300もの神社があることに触れ、「恵み

宗派超え 人のつながり支援

をもたらず海そのものの驚異も理解していた先人が、海を鎮めるために祭ってきた」と説明する。海への畏敬が、防波堤などの防災技術が進むことで忘れられるのではないかと懸念する。

科学技術の粋を集めた原発で事故が起き、放射能汚染は広まる。線量計の数値でしか実感できない不気味さや、人災とも言える状況に、不安や不信は高まる。島蘭進・東大教授(宗教学)は「阪神淡路大震災と同じ年に起きた地下鉄サリン事件で宗教への信頼が壊れた。16年後の今回、さらに国家や研究者といった権威の信頼が壊れた」と指摘する。

信頼回復という課題を抱えながら、各宗派は早い段階から復興支援に取り組んでいる。稲場圭信・大阪大准教授(社会学)は、ソーシャルメディアを使って宗派を超えて情報の集約・共有化を図っている。「放射能のわが子への影響は大丈夫か」といった、ソーシャルメディア上で同じ思いを抱く人々のゆるやかな連帯に注目する稲場准教授は「地縁や血縁など従来の人間関係の希薄化するなか、『共感縁』が生まれつつある」と期待する。人のつながりを支えることに宗教の役割を見いだす意見が相次いだ。

鎌田教授は「被災後に何が起きているか。どのような理解が必要か。研究を通じて整理していきたい」と締めくくった。